



奇刊ケルルタイ増刊

All About Sports

Vol.2

All About Sports

ISBN978 4 905126 04 1
C1095 W0000E

1921095010004

9784905126041

「絶対に買うべきミニコミがそこにはある」

スポーツの語源はラテン語のdeportare(「ある物を當の場所に運び去る」, 転じて「憂いを持ち去る」)にさかのぼるといわれる。つまり、日常の様々な憂いや苦悩から解放される事がスポーツの本質なのだ。
だが、我々にはスポーツを語る言葉がない。スポーツをいままでやってきた人間たちには自分たち自身を語る言葉があるだろう。だが、私たち、スポーツが苦手な人間にはスポーツとは語る言葉はあるのだろうか。自分が音楽を作っていない人の音楽論と同様に、自分でスポーツができない人間のスポーツ論はどこかウソ臭く、過剰に物語的である。我々はそもそも「スポーツ音楽のくせにスポーツを語る」困難さから出発しなければならない。
ここで、より事態をややくしているのは我々の人生においてスポーツが無視できるような存在ではない、という事だ。

ふんばってほしいよね、みんな!!

またロスタイムがあるからねー

シュートで終わりたいですね!

いやーロスタイム4人くらいは欲しいですねー

17番この選手はまあ小柄なんですけども、なかなかパスワークいいですから

ふざけたロスタイムですねえ

名波さんー長友タフですね!

シューターをキックでゴールに入らせた。この調子でゴールキーパーをキックでゴールに入らせた。

ボールを動かしていいからいい

は集中ですよ

はじめに

紳士は櫓の上に立って、そこから話し始めた。ばかたちはそれを見物に集まった。ばかたちは考えていた-その紳士は手を使わないで頭で働く方法を、実地にみせてくれるだろうと。が、老悪魔はただ口だけで。どうしたら働かないでいきいけるかということ、教えるにすぎなかった。

トルストイ『イワンのばかとそのふたりの兄弟』

スポーツの語源はラテン語のdeportare（「ある物を別の場所に運び去る」、転じて「憂いを持ち去る」）にさかのぼるといわれる。つまり、日常の様々な憂いや苦悩から解放される事がスポーツの本質なのだ。

だが、我々にはスポーツを語る言葉がない。

スポーツをいままでやってきた人間たちには自分たち自身を語る言葉があるだろう。だが、私たち、スポーツが苦手な人間にはスポーツとは語る言葉はあるのだろうか。自分が音楽を作っていない人の音楽論と同様に、自分でスポーツができない人間のスポーツ論はどこかウソ臭く、過剰に物語的である。我々はそもそも「スポーツ音痴のくせにスポーツを語る」困難さから出発しなければならない。

ここで、より事態をややこしくしているのは我々の人生においてスポーツが無視できるような存在ではない、という事だ。スポーツが本当に単なる気晴らしであればそんなことを考える必要はない。

例えば、ワールドカップやオリンピックなどに始まり、知らない競技の知らない選手、知らない大会がさも重要な大会であるように喧伝され、我々はそれを「知り」、「感動」しなければならない。それに背をむければ非国民である以上に空気読めよ、となる。角澤照治が「絶対に負けられない戦い」と叫ぶ以上、それは絶対に負けられないし、我々はそれに興味関心を持って感動しなければならないのだ。そもそも、あなたの会社の隣にいる「体育会系」のウザさに耐えなくてはならない！同じ気晴らしであってもゲームや読書とは全く別の重みがスポーツには与えられている。

だが、それ以前にスポーツが苦手なくせにスポーツを語りたくなってしまいたくなるぐらいにはスポーツとは魅力的だ。ひいきのチームの勝敗に一喜一憂し、喜びも悲しみも一緒に分かち合う。人生を共に歩むチームをみつけた人間は間違いなく幸せ者だ。

スポーツとは一体何か。そして我々がそれとどう関わるべきか。それが本書のテーマだ。『奇刊クリルタイ増刊「dorji」 All About Sports』それではよろしく願いいたします。

(republic1963)

目次

■マンガ

- ・ めがろまにあっく「出張版ゆるねば！～地域リーグ観戦記～」
- ・ 吉川にちの「ひもひもひもこちゃん出張版」

■座談会

- ・ スポーツ×ボンクラ座談会（Terasuy×千葉のイニエスタ×ryoQ10×Parsley×republic1963）
- ・ 特別企画 スポーツマンガを語ろう！（ゆりいか×ryoQ10×republic1963）

■論考

- ・ かつとんたろう「ダイヤモンド考」
- ・ ryoQ10「KO-KO-Uのスポーツ」
- ・ 松永英明「なみだの陸上部」
- ・ 近藤正高「幻の名古屋オリンピック」
- ・ 長尾メモ8「格闘技村と御用マスコミ」
- ・ pal9999「サッカーにおける夢と現実のはざままで」
- ・ nakayossy「スポーツとしてダーツを楽しむ～ボクがダーツバカになったわけ～」
- ・ parsley「競馬の物語の喪失と復権」
- ・ republic1963「「星野本」研究」「プロ野球監督・星野仙一」とは何者なのか？

■レビュー

- ・ dorj review「All About Sports」編

■小説

- ・ 近江舞子「肢体は浮かぶ、望まねど」
- ・ 若葉幹人「第二の人生」
- ・ 小山内豊「Craftsman 715」
- ・ republic1963「He is inside, she is outside(Sports MIX)」

■頒布詳細

奇刊クリルタイ増刊「dorj」Vol.2「All About Sports」

B5、104ページ 1部 1,000円

文学フリマ 小展示ホール エ - 02 にて頒布

■スタッフ

企画・編集 ドルジ制作委員会

表紙イラスト 吉川にちの

表紙デザイン ミズキシユン

企画 ryoQ10、Parsley、republic1963

DTP デザイン 吉川にちの、ryoQ10、千葉のイニエスタ、Parsley、republic1963

ボンクラ×スポーツ座談会 (1)

■スポーツ、得意なの？

republic1963 (R) :最初に皆さんのスポーツ歴みたいなところを教えてください。

Parsley (P) :小学校低学年はいやいや水泳。小学校高学年～中学生はいやいや剣道。体育祭ではそこそこ活躍してましたが、喘息もちなので、基本的に体動かすのは嫌いですね。

R: 体育の成績はどうでしたか？

P: 5段階評価で3か4でしたね。一度奇跡的に5を取ったことがあるくらいです。球技が絶望的にダメでした……。それでも成績がそこそこののは陸上の成績がよかったおかげです。

R: ryoQ10さんはどうでしたか？

ryoQ10 (Q) :小学生時代は水泳・バスケ(高学年)、中学生時代はバスケ(半年)、軟式テニス(2年間)とやって高校時代は硬式テニス(一年間)、フットサル(残りの期間をサークルノリで)やりました。体育の成績はだいたい4.5です。

千葉のイニエスタ (千) :小学校時代は陸上部で長距離だけは得意でしたが、逆上がりができませんでした。中学校～高1は卓球をやっていて、区大会シングル優勝、団体都大会ベスト8、私学戦シングルベスト16でした。中高は体育は球技とマラソンと遠泳しかやりませんでしたね。体育の評価はだいたい10段階で6～7くらい。大学でもサークルで卓球をやりました。

R: お前らスポーツ苦手とか言うな(笑)! 私の場合、体育はほとんど2ですからね! 当時の体育教師(後に生徒とのセクハラ疑惑が持ち上がり左遷)との折り合いが悪く、1取った事もありますから。小学校: 水泳、中学校: 卓球 高校以降: なしです。水泳だけは比較的得意でした。

Terasuy (T) :小学校1年～6年は父が主任をしていたスイミングスクールに通っていました。小学校5年から陸上部に所属 短距離、ハードル、走幅跳を嗜む。中学 陸上部所属 100m,200m, 走幅跳(全日中出場)。高校 陸上部所属 100m,200m,走幅跳(IH7位),三段跳(関東大会出場)。大学 陸上部所属 100m,走幅跳(全カレ3位)。記録だと100m 10.65 / 200m 21.70 / 走幅跳 7m71cm / 三段跳 14m50cm

といった感じです。

R: (ブワッ) 生きててスイマセン

ボンクラ×スポーツ座談会 (2)

■スポーツ「観戦」のきっかけ

R: イニエスタさんがサッカー観戦をするようになったきっかけを教えてください。

千: 実家の近くに柏レイソルのホームスタジアムがあって、近所からJリーグ選手や日本代表とか出たりもしてたので、サッカーが人気ある地域でした。弟がサッカーをやっていて、家族全員、家でサッカーを見ていたので、Jリーグが始まってから自然に見るようになりました。中1～中3：Jリーグ、高1～高3：競馬、大学：Jリーグ、欧州サッカー、競馬、社会人：Jリーグ、欧州サッカー という感じです。社会人になるまではレイソルの試合も年間数試合しか生観戦してなかったですが。

T: 柏は地域全体で応援していましたからね。

Q: 私のサッカー観戦は93年のJリーグ開幕がきっかけです。私の地元は鹿島なのですが街全体で動員をかけていて、私の家族も動員に参加していました。私は当時6歳ですね。実は選手入場でジーコと手をつないだこともあります。なので自然と鹿島アントラーズ以外応援しなくなりました。

P: 僕の場合は父親がドラゴンズファン（岡崎出身）で、巨人ー中日戦は必ず見ていました。あと、オリンピックですね。

千: 自分はウイングポストで競馬覚えて実際の競馬もやるようになりましたよ。

R: 私も野球見始めたきっかけは「パワプロ2」なんですけどね(笑)皆さん結構まともな理由で見てるんですね。テラシィさんはどうですか？スポーツ中継は見るんですか？

T: あまり見ないです。特に最近はほとんど見ないですね、見るのはF1とたまにやってる駅伝や陸上の試合くらいです。高校～大学は競馬を見ていました。大学の寮に日刊スポーツが毎日来ていたので見るのが日課でしたね。まだ学生なので馬券は買えませんでした。

■俺の寮は「マリみて」じゃない！

R: 大学の寮というのはどういう感じなんですか？

T: 私がいた大学の場合は部活ごとに寮が分かれています。陸上部の場合、基本全て学生が運営するという方式をとっていました。まず一部屋に入居する学生は2人になっているのですが、一人が部屋長、もう一人が部屋っ子、というポジションとなります。

R: 部屋っこ？

T: 基本、先輩と後輩が相部屋になりますので、そういう呼び方なのです。で、部屋の主導権を全て握っているのは、部屋長です

R: 手鳥足とり教えてもらえる感じなんですか？ 学生生活のイロハを。

T: そんな『マリみて』みたいな制度はありません！一緒に呑んだくれたり、ゲームしたり、するだけです(笑)。仲が悪い部屋長と部屋っ子もいたりします。部屋のベッドは2段ベッドになっていて、このベッドはかなりでかいので布団をひいても、横50cm、縦50cmくらいのスペースが出来ます。なので、部屋っ子はまずベッドの上に自分の城を築きます。ベッドにはカーテンがついていて、閉めれば見えません！なので、「必要な時」は先輩が出ている間に、寝ているように見計らってやるという。

Q: なるほど！

T: 基本部屋はフリーです。部屋のなかくらい、自由にさせてあげるとというのが暗黙のルールみたいなものです。僕は部屋っ子のころ、ラックを足側に置いて、テレビとゲームを、PCをセットして、部屋にしました。ですが、たまに部屋長が、ベッドの上を覗いてきたりすることがあるので、ヘッドフォンをして「色々と」やっている時は注意が必要です。

(この続きは『dorj Vol.2』本誌にて！)

KO-KO-U（孤高）のスポーツ（1）

KO-KO-U（孤高）のスポーツ（ryo Q10）

K・O・K・O・U。孤高。

リア充??ふっ、リア充などただの俗物に過ぎない。群れるしか脳のない豚どもに背を向け、一人孤独の道を進む一匹の狼。アメリカからやってきた全く新しい概念。それが、K・O・K・O・U。孤高。要するに、ツイッターでネタポストをしても@リプライが飛んで来るのは常に業務連絡のみとか、合コンに社会経験のためだと参加して自らに消えないトラウマを植えつけ二度と参加しない等の体験を持つ猛者の事である。今回は私の孤高体験を語ろう。

我らが聖地。鹿島スタジアムで孤高体験を語ろう。私は毎試合通う熱心のサポーターではないが、行ける時はできるだけ通うサポーターだと自覚しているが、その代わりスタジアムに行く時の気合い、準備は常に最高にしている。荷物は必要かつ最小限の物のみ。レプリカユニホーム、必勝Tシャツ、タオルマフラー、財布、試合チケットを入れる。試合の日の朝は早い。7時には家を出て、東京駅八重洲口バス乗り場から出る。東京発鹿島スタジアム行きのバスに乗り込み、わずか一時間半足らずで、聖地鹿島スタジアムに到着する。近いので皆さん一度鹿島スタジアムに観戦しに行くべきだ。到着すると、既に地元サポーターがたくさんいる。開門時間を過ぎていればすぐに入場するが、まだ時間になっていない時は鹿島サッカーミュージアムを見学し、鹿島の歴史を再確認。開門時間になるまでスタジアムの周りを散歩しながら、試合への士気を高める。朝から気合いは最高潮だが、マイパワースポットを巡った私は更に気持ちが上がっていくのが分かる。開門時間が来たら入場。ゴール裏上段に席を取り、無地の赤い必勝Tシャツに着替えて戦闘体制に入る。疑問に思う人がいるかもしれないので、一つだけ言うておこう。何故、レプリカユニを着ないのかと。チームを思うならレプリカユニを着て応援すべきなのではないかと。もちろん私もサポーターだ、当然レプリカユニを着て応援したい。しかし、レプリカユニを着ると鹿島は何故か勝てない。その点、必勝Tシャツは縁起がよく、このシャツを着て10回以上は観戦しているが、鹿島が負けた事は一度しかない。私はただ鹿島を応援しに来ているのではない、鹿島を勝たせるために応援に来ている。その目的を果たせないのでは意味がない。戦闘服に身を包み、既に試合が待ちきれない状態だがその前の一つお楽しみを忘れてはいけない。そう、それがスタグルメ。鹿島スタジアムのグルメは他とはレベルが違う。スタジアムの中で火を使う事を許可されているので常に最高の物が提供されている。牛スジ煮込、ハム焼き、ロングソーセージ、メロンパン等茨城の名産品が数多く食べられる。これを食べるためだけでもスタジアムに来ていただきたい。まず私は、ハム焼き2本とビールを購入し、勝利の為に最初の杯を交わす。相手などいない、もちろん1人で。ハム焼きのジューシーさがたまらない。アルコールも入れてスイッチオン。もう私を止めるものは何もない

KO-KO-U（孤高）のスポーツ（2）

このまま勢いに任せてグルメを食べまくる。私は欲に溺れているのでは無い、意味のある行動である。私が大量にグルメを消費して大量に鹿島にお金を落とす。こうして、地域を活性化させてチームの強化に努める。完璧だ。私も満足できて、チームも地域も満足できる。これ以上のWIN-WINな関係があるだろうか。お腹が限界に近づいた頃に試合前の締めにはM・O・T・S・U・N・Iモツ煮を注文。鹿島スタジアムにはモツ煮の店がたくさんある。大きな釜で開門前から長時間煮込まれているモツに茨城の野菜たち。店によって個性もありトマトモツ煮なる全く新しい概念のモツ煮を振舞ってくれる店もある。大事な事だからもう一度言おう、鹿島のスタグルメは一般人にもオススメできる一度は食すべきソウルフードであると。たまに、食べ過ぎ、飲み過ぎで試合前に自分に負けている者を散見するが、これは愚の骨頂だ。自らに打ち勝てないB・U・T・A豚どもの応援が選手に響くだろうか。ドレスコードを整えいつものメニューをこなし、心身ともにキメた頃にピッチの方から太鼓の調べが聞こえてくる。選手たちが試合前の練習のために入場してきたのだ。私は引き寄せられるように自分の席へ戻り、赤一色のスタンドの中で応援が始まる。メガホンから聞こえるコールリーダーの声と、太鼓のリズムに合わせて全力で声を出す。もうすぐ本番が始まる高揚感を抑えきれずに声量へと変換する。ちなみに、私がまともに声を出すのはこの瞬間がこの日始めてである。応援者たるもの、試合に全力を尽くさなくては行けない。日頃リア充のB・U・T・A豚どもは多くの時間をお喋り等という喉を痛める行為を好き好んで行い、承認欲求を満たしあう。自らがM・U・R・E群れの一員である事を確認するためにお喋りをし続ける。私は奴らとは次元が違う。応援のために日常生活も犠牲にして、この厳しい生活を自ら選択している。その部分を勘違いしてはいけない。そうしてウォームアップしている選手たちを眺めつつ、応援を続ける。選手たちは約30分試合前のいつものメニューをこなして、最後のミーティングのためにロッカールームに下がっていく。

程無くして、MCによるテンションの高い声で選手紹介が始まる。まずは、アウェー側から紹介される。ピッチの反対側から威勢のいい声が聞こえ、同じ応援するものとして素晴らしさを感じる。しかし、勝つのは私たちだ。その応援が不毛にならないためにも全力でこちらも答えなければならない、試合でも、応援でもそれは変わらない。アウェーの選手紹介が終わると今度はホーム、そう私たちの選手紹介になり、テンションの高いBGM、煽り映像とともに、1人ずつ丁寧に紹介される。1人紹介される毎に、オイッ！と叫び選手たちを鼓舞する。スタメン、控え、監督と順々に紹介され、最後にサポーターもチームの一員として呼ばれて終了となる。そして、試合前に下の方ではゴール裏の中央を覆い尽くす弾幕が掲げられ、私はタオルマフラーを前に差し上げコールを熱唱、その終わりとともに一瞬の静寂。テンションが最高潮に上がるとともに自分の気持ちが引き締まる。自分のスピリチュアルステージが高まっていくのを自らの身を持って感じる。本番前に酔いそうた。いや、実際は酔っているのだが頭には今日の目的、すなわち勝つ事がちゃんと入っているので問題ない。

（この続きは『dorjVol.2』にて！）

サッカーにおける夢と現実のはざままで (1)

サッカーにおける夢と現実のはざままで Pal - 9999

本稿を執筆している時点では、まだ、チャンピオンズ・リーグの決勝は行われておらず、マンチェスター・ユナイテッドとバルセロナのいずれが勝者となっているのかは未だにわかっていない。従って、現時点では、いずれのチームがトロフィーを掲げるかについては、わかっていない。また、どちらのチームのほうが優れているかについても、書くつもりはない。しかし、チャンピオンズリーグの準決勝において行われたバルセロナ対レアルマドリードの戦いをみて、正直、もやもやとしたものを抱えている。おそらく、あの試合をみた人は、皆、そういう感情を抱いているのではないかと思う。しかし、今回、レアル対バルサの試合について書くことにしたのは、これが、サッカーにおける永遠に答えの出ないテーマ、いや、あるいは、スポーツ全体におけるテーマでもあるのだが、「正々堂々と戦って負けるか、あるいはいかなる手段を用いても勝つか」という問題に関わる試合だったからだ。サッカーにおいては、この問題は、「美しいサッカー」と「結果至上主義のサッカー」の対立でもあり、また、アルゼンチンにおいては、「メノッティ派」と「ビラルド派」の永遠の対立ともなる問題である。

サッカーにおける夢と現実のはざままで (2)

本題に入る前に、ちょっとした寄り道をお許し願いたい。2005年5月25日のチャンピオンズリーグ決勝戦の話だ。いわゆる「イスタンブールの奇跡」と言われた試合の話である。この日、トルコのイスタンブールのアタテュルクオリンピックスタジアムにおいて、二つのチームが激突した。片や、アンチェロッチェ率いるイタリアのACミランと、片や、ベニテス率いるリヴァプールである。当時、ACミランは、まさに絶頂期にあり、キャリアの絶頂期にあったカカー、セードルフ、ピルロ、ガットウーゾの中盤に、パンカロ、マルディーニ、ネスタ、カッファを揃えた4バックはヨーロッパトップクラスの実力を備えていた。実際、監督だったアンチェロッチェは、この年のミランを最強だったとしている。一方で、リヴァプールは輝かしい歴史をもつものの、プレミアリーグ移行以後は、優勝経験がない上に、プレミアリーグにおいてはCLへの出場権を逃すなど、控えめにいっても良い状態のチームではなかった。ベスト8が揃った時点で、リヴァプールは最も期待されていないチームだった。しかし、リヴァプールは、準々決勝でカペッロのユヴェントス、準決勝ではモウリーニョのチェルシーを撃破し、驚くべき事に決勝まで駒を進めた。決勝は、絶頂期にあったアンチェロッチェのミランと、CL最大のダークホースとなったリヴァプールの間で行われたのだ。二つのチームの間には明白な戦力差が存在したし、下馬評ではミランが優勢だった。リヴァプールは堅守速攻のチーム、ミランはイタリアでは珍しいポゼッションサッカーのチームであり、試合においても、カウンター狙いのリヴァプールとボールを保持して攻めるミランという形になると思われていた。これは、実力差があるチームが戦う場合においては珍しい事ではないし、弱いチームが格上を叩く場合には、まず守りから入るのは定石である。だが、このゲームプランには一つの弱点がある。つまり、先制点を取られてしまうと、全てがご破算になってしまうのだ。リヴァプールは守備に一つの弱点があった。二人のCB、つまり、この試合ではヒーピアとキャラガーは高さはあるものの、スピードとアジリティに欠けていた。そのため、2ライン間で規格外のスピードをもつカカーが前を向いてボールを持った場合には、とてもではないが守りきれものではない。そのため、ライン間にシャビ・アロンソが入った4141を採用し、中盤と最終ラインをコンパクトに保つ事が戦術上の至上命題だった。逆にいえば、ミランは、このスペースをいかに広げるかが攻略の鍵を握っていた。

サッカーにおける夢と現実のはざままで (3)

リヴァプールのゲームプランは開始一分で崩壊した。セットプレーからマルディーニがゴールを決めてミランが先制したからだ。そのため、ミランにとっては願ってもいない状況が出現した。リヴァプールの二人のCMFであるシャビ・アロンソとスティーブン・ジェラードの二人が前に出て攻めざるを得なくなったのだ。こうなってしまったら、ライン間のスペースが開いてしまうのは当然だった。前半39分、まさに、そのスペースをカカーに使われ、シェフチェンコ、クレスポと繋いでゴールが決まった。44分にはクレスポがカウンターから駄目押しの3点目を決め、事実上、試合はここで決したかに見えた。誰もが、そう思った。前半で3点を奪われ、相手には世界最高のDFがいる。普通の人なら、ここで諦めてTVを消していた所だろう。リヴァプールのサポーター達は、諦めきれなかった。スタジアムとその周辺に集まった赤い服を着たサポーター達は、自分たちのチームが「終わってしまった」のだと思いたくなかった。うちひしがれ、絶望しながらも、彼らはかつてイギリスで最も偉大だったチームへの応援歌「You'll NEVER walk Alone」を繰り返し繰り返し歌い続けた。自らのチームが再び立ち上がり奇跡を起こすことを願って。この時点で、誰もがリヴァプールは負けると思っていた。世界最高クラスのMFとDFがいるミランから後半で3点とるなど、この時点では不可能なミッションだった。

だがそれは起こった。死んだはずのチームが突如として墓場から蘇ったのである。リヴァプールの監督、ベニテスは、後半、修正をほどこした。リーグ戦で一度も使ったことがなかった3バックを採用し、ジェラードをトップ下にあげたのだ。そして、この采配が的中する。後半54分、リーセのクロスをジェラードがヘディングでたたき込むと、ここからリヴァプールの追撃が始まる。56分にジェラードが起点となってスミチエルのミドルシュートで1点差まで詰め寄せると、スタジアムのリヴァプールサポーターの「You'll NEVER walk Alone」は大合唱となり、イスタンブールの隅にまで届かんばかりに膨れあがった。そして、3点目。ゴール前でGKと一対一となったジェラードがガットゥーゾに倒されてPKを得た時には、スタジアムの大合唱は悲鳴へと変わっていた。ミランサポーターの嘆きの悲鳴とリヴァプールサポーターの歓喜の悲鳴へと。試合は、延長戦へともつれこみ、最後はPK戦となった。そして、勝者となったのはリヴァプールだった。これはスポーツの枠を超えて、人々を熱狂させる出来事だった。「世紀の試合」と形容されたのも当然だった。そして、また、人間の中に眠る最良の部分を見せてくれる出来事だ。何度倒れようとも再び立ち上がる姿。負けを受け入れず、諦める事を知らない精神と決意。例え、いかなる逆境におかれても自身の肉体と精神を武器に極限まで使い戦うという姿。それは、美しいサッカーのなんたるかを何よりも雄弁に物語っていた。敗北に諦めず再び立ち上がって戦おうとする人々全てをリヴァプールの勝利は鼓舞するものだった。

さて、話を「イスタンブールの奇跡」から今回のエル・クラシコに戻す。その前に、バルセロナとレアル・マドリードというチームの特殊性について、簡単に説明しておく必要がある。

(この続きは『dorjVol.2』で!)

He is inside, she is outside(Sports MIX) (1)

よく若いヒョーロン家やシャカイ学者の偉い人って、サークルクラッシャーとかメンヘルをバカにするじゃないですか、私はアレが物凄く嫌いなんですよ。なぜって、サークラにしてもメンヘルにしてもそりゃ、周りの人から見たら迷惑だし、「ウォッチ」してたら面白いでしょうよ。だけど、あんたらホントにサークラに迫られてヤラずにいられるの？って問いたい。どうせホイホイ、サークル崩壊させてんだよ、あんたらも。そういう人に限ってワナビ志望のメンヘル女とよろしくパコついてるもんだからそりゃあんた、我々も「**2010**年代のサブカルの前線を疾駆」することを志望するわけですよ。

ブログ「**Siamese Dream**」2013年4月17日付エントリ『ポストゼロ年代をサヴァイブする想像力』から引用

■マシーナ/ザ・マシーンズ・オブ・ゴッド-1

剣持テツローは気だるく起床した。7:45。いまだ夢心地である。傍らには、女Aが寝ている。この物語において彼女の事を女Aと呼ぶのは、テツローも彼女の名前すら知らないからで、そして、この物語において彼女の名前は記号的意味しかもたないからだ。テツローは女Aに一瞥もくれず、粛々と出勤準備をする。着替えもそこそこに自転車で職場へと向かう。そして、女Aはここでこの物語から退場いただく、彼女には彼女の人生がある。女Aとしてではなく、苗字と名前のある人生。だが、それはここで語られるべきではない。自宅から職場までは直線距離にして30分弱だが、自転車ではもう少しかかる。自転車通勤が「チャリ通」ともてはやされたのはしばらく前からだが、テツローはそのずっと前から自転車通勤だった。だから、オシャレ自転車に乗って「Gainer」あたりから拝借した通勤スタイルで会社に向かう自称「ヤングエグゼクティブ」を見ると、はいはい、どうせどこ行くにもIBMのノートPC持ち歩いてるんでしょ。使いもしない議事録作りご苦労さん、と心の中で悪態をつく。途中、「藤そば」に立ち寄る。このうらびれたそば屋は味がそこそこだが何より、周りに「Gainer」や「AneCam」がいない。だから「藤そば」で食べる毎日の月見そばはテツローにとっての至福の時間だった。セルフサービスで天かすを少しとネギを若干大目に入れる。月見そばはしばらくおいておいてほんの少し固まったところを少しだけかき混ぜる。黄身をほんの少しだけ麺つゆに広がった状態でソバに絡ませ、一気に食べるのが一番美味しい。これはテツローの長年の藤そば通いの成果の一つだ。朝食をすませ、店を出たところで自分のスマートフォンを起動する。

「ちょうしょくなう」

He is inside, she is outside(Sports MIX) (2)

■パニシング・ポイント-1

青空。

教室では歴史の授業中だ。学校の教師がフランス革命において果たした民衆の役割について熱く語っている。「王家の専政に対抗して崇高な理念の元、立ちあがる民衆たち！」自由と革命の意義を熱く語る教師。お前は何言ってるんだ。まったく理解できない。おれたちにそんなすごいことを成し遂げる力があるのなら今、ここで、なう、このクラスにいるヤンキーどもをどうにかしてくれよ担任先生、といつも思う。だが、ヤンキーたちが「ほんとうに」クラスから排除される事はない。それは、彼らのする「反抗」が周りの教師たちにとってはすでに織り込み済みだからだ。彼らが「反抗」して、後に「更生」して「善良な市民」として「社会を構成する一員」となる事、それはお約束であり、社会を構成する大切な「物語」なのだ。だから、ヤンキー達の「反抗」や「悪さ」はファッション的に消費され、「ほんとうに」社会から排除される事はない。それは、ブラウン管に映るあの「お笑い芸人」という偉大なる職業の人々が教えてくれている。隣にはオタクの皆々様。クラス内の序列（カースト）において最下層に位置する人種である。といっても彼らの生活はそれほど悲惨ではない。クラス内のカーストに上手く適応した彼らは決して上位グループを脅かさない。だから、たまにからう事はあっても、上位グループが本格的にオタク軍団をいじめることはない。上位グループだってクラス内での合意形成が必要な時もある。修学旅行で「合法的に」オタクの皆様と天上界の皆様を別々のグループにする必要だってある。学級委員やクラスの役職決めの際に彼らの票が必要な時だってある。だからこそ10人弱のオタク軍団を敵にはまわしたくない。見事な弱者の戦術だ。客観的にはオタクの皆様の方が世渡りが上手いのでございますよ、お嬢様、おぼっちゃま。

だけど、俺は無色透明な存在だ。ヤンキーでも、オタクでもない、どこにも属せず、誰からも認識されず、何も生み出さない存在。昔、「透明な存在」と言って人を殺した人間がいたが、その気持ちが少しだけわかる気がする。俺は誰からも認識されることなく、何の「イベント」も起こらず、ただひたすら黙って、静かにこの高校時代が過ぎていってほしいと思っているだけだ。だけど、そんな俺もたまにどうしようもなく虚しくなる時がある。

He is inside, she is outside(Sports MIX) (3)

■マシーナ/ザ・マシーンズ・オブ・ゴッド-2

2014年。インターネット網が日本中隅々まで張り巡らされつつも、SF的世界が現実到来するには程遠い時代。膨らみ続ける赤字国債に混乱する政治、少子高齢化と既得権を手放さない老人たち。難問山積みの「日本」は外国から緩やかに死を迎えつつある大国と認識されていた。だが、ここで「日本」はこの国のお家芸とも呼べる逆境での恐るべき底力を発揮する。その変化はある特定の「時点」ではなく、特定の「時期」における変化であった。あとから振り返ればそれは「あり得ないほどの大変化」だが、そこに住んでいる人間にとってはそれが認識できないほどの変化。2014年はそんな「時期」の1「時点」。

「つぶやいたー」は140字程度の「つぶやき」をネット上にアップロードするだけのサービスである。

だが、「つぶやいたー」は日本を、日本人の生活を変えた。最初、我々は自分が何を食べ、どんな映画を見ているのか、何を考えているのか、こぞってアップロードしたのだ。もちろん、それは些細な自己顕示欲だった。だがそのうち、このサービスは同じ映画、同じバンドが好きな、同時に同じことをやっている人同士が「つながる」に非常に都合のよいサービスだという事がわかってきた。同じイベント会場、例えば、フェスで、ライブ会場で、エロ同人誌を求める行列で。そして同じテレビ番組を見ながらつぶやく事で場所や時間を超えて「つながる」事ができたのだ。そのうち、サイト側も「つぶやき」のログを収集・分析。同じような「つぶやき」をする人を「オススメユーザー」として紹介するようになった。今や、「つぶやいたー」のサービスは電子マネーのサービスや位置情報サービス、SNSとも連動し、我々がコンビニで何を買って、どの駅で電車を降りたのか、誰と友達になって誰とケンカ別れしたのかは自動的に「つぶや」かれ、即座に全世界に公開されるようになった。

つまり、「つぶやいたー」というインフラによって、我々の「リアル」は本格的に「ネット」にアップロードされるようになったのだ。リアルとネットの融合。そのきざはしに我々はいた。これをプライバシーの侵害などという人間はアホだ。周りは誰も知らないようなマイナーなバンドの話がしたい、会社で気になる彼女と食事に誘うきっかけを作りたい、息子がちゃんと塾に行っているか、あの映画は面白いのか、隣はなんであんなにうるさいのか、年金をもらい続ける100歳の老人が実在か非実在か、そういった情報を即座に手に入れられ、しかも人間関係の誤配が「あらかじめ設計されている」。プライバシーを侵害されたほうが我々にとっては遥かにメリットが大きい社会の到来。かくして、プライバシー権などという言葉は学校と一部のアホの口からのみ聞かれる言葉となった。

(この続きは『dorj Vol.2』本誌にて！)

奇刊クリルタイ増刊『dorj』 v o l . 2 (お試し版)

<http://p.booklog.jp/book/27490>

著者 : khuriltai

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/khuriltai/profile>

発行所 : ブクログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/27490>

ブクログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/27490>